

2 ロビン・フッドの出奔^{しゅっぽん}

ロビン・フッドの母親がこの世を去って
十二年の月日が過ぎた
どうにか金を工面して
出自に相応しい墓をたてた

教会墓地は木々がうっそうと茂る丘の上 5
だがそこは^{ひかり}陽光が射し 風が抜けるところ
まるで天が静かにこちらを見つめ
微笑みかけているかのようだった

時おり教会墓地を見上げるロビンの眼には 10
うっすらと温かな涙が浮かんでいた
だが ヴィア修道院に向けるその眼には
別の思いが浮かんでいたという

ヴィア修道院が不当に奪った財産や
奴らの^{おご}驕りに興味はなかった
ロビンには若さと力と健やかさがあった 15
それだけで十分だった

だがロビンは思った 優しい^{は は}母親の頬が
どんなに^こ痩けていったかを
^{は は}母親が日を増すごとに弱くなり
やつれ果てていったことを 20

夕べに讃美歌をうたおうとするその声が
どんなに弱々しく消え入ったかを
それとは裏腹に修道院の聖歌隊の大声が
どんなに傲慢で不快であったかを

またロビンは思った 貧しい人々のことを 25
どんなに分け前も無く働き続けたかを
修道院の扉の前でどんなに施しを求めても
扉は閉ざされたままであったかを

更にロビンは思った あの修道士たちのことを

奴らはジャラジャラ音を鳴らして馬で行き来し 30
坊主頭を頂いているほかはすべて
着る物 持つ物 まるで王様のよう

それから剛胆ロビンが思ったのは 国王のこと
どんなに国中の森と鹿を独り占めしているかを
年にたった一頭でも鹿を殺したからと 35
どんなに飢えた者を吊るし首にするかを

こんなことを思ううち
ロビンの弓は大地を深く抉^{えぐ}っていた
すると昔ながらのシャーウッドの森の中
あたりを見回している者がいるのに気づいた 40

「ウィルよ どうした
そんなに青く怯えた顔をして」
「ああ お頭 こんな顔にもなりましょう
俺はもう疲れました

もう疲れ果てました 45
もし俺がこの木をくすねて
矢^{やはぎ}作にでも売らなければ
愛するこの森の中で たちまち飢え死にです

この森の中で俺はこれまで
怯むことなく幸せに生きてきました 50
野原を駆ける馬のように
お頭の前 自由に暮らしてきました」

「ならばウィル・スカーレットよ ついて来い
このロビン様について来い
お前の忠義 お前の歓び 55
未だ消えぬその傷を 俺は決して忘れはせぬ

伯父上の家来はだれ一人
助けに来てはくれなかった
俺がポケットやごみ箱をさらって
銅貨一枚 パン屑^{ひとかけ}一欠片を探していたとき 60

ウィルよ しばしここで待て
俺のために松明をかかげておけ」
ロビンはそう言い残すとすぐさま

森の中に半マイルほど入っていった

ロビンは頬を真っ赤に染めて
強く弓を引き絞り 矢を放った
一頭の鹿がひとときわ高く跳ね
シダの上で動かなくなった

ロビンは本来の身分である
礼節正しい騎士のように
鹿の右肩の肉を
きれいにそぎ取り 切り分けた

「ああ お頭 何ということ
こんな俺のために 何ということ」
「ウィルよ 肉を焼け ワインは無いが
国王に負けぬ宴を開こう」

肉を受け取り 半分焼いたところで
大粒の涙が溢れて何も見えなくなった
だが二口目を食べようとしたとき
蹄の音が聞こえてきた

ロビンたちはじっと耳を傾け
馬の蹄の音を聞いていた
ウィルは力無く 肉のそばに膝をつき
ロビンは そんなウィルのそばに立っていた

「奴を捕えろ 奴を捕えろ」
大修道院長の野太い声が森中に響いた
ロビンは羽の整った矢に触れ 目くばせすると
ウィルは膝を立てて跳び上がった

「奴を捕えろ 奴を捕えろ」
現れたのは大修道院長と三人の森番たち
ウィルが叫んだ「鹿を殺したのはこの俺だ」
すかさずロビンは叫んだ「何人たりとも近づくな
近づく者は己の屍を晒すことになる」

しかし奴らは向かってきた
一番前の男が正面で矢を受け
勢いそのまま うつ伏せに倒れた
道端で躓いて転んだように

他の者たちは術も無く大修道院長の方を振り向いたが
「奴を捕えろ」大修道院長はなおも叫んだ
だが 二番目の男が再び振り向いた瞬間 110
その脇腹に矢が深く刺さった

「奴を捕えろ 奴を捕えろと言っておろうが」
苛ついた顔で大修道院長が叫んだ
「いま捕えねば いずれ此奴らは図に乗って
聖職者はおちおち夜も眠れなくなる」 115

しかし それが最期の言葉となった
大修道院長が剣を突き出そうとしたその瞬間
そのワインの皮袋のようにでっぷり太った腹に
一本の矢が突き刺さった

ワインの皮袋のような 110
一斤分のパン生地のような
はたまたま^{かぼちゃ}南瓜か 大きな骨付き肉のような腹に
ぶすりと音を立てて矢が刺さった

「全く」ロビンは畏れることも無く
笑いながら言った 115
「伯父上^{ガメリン}の頃から変わらず愛するこの森で
これほど太った鹿が仕留めたことはなかったな」

「どうか どうかお願いします 勇敢なロビン様」
離れたところから 三番目の森番の声が聞こえた
「貴方様のことを知って以来 120
貴方様がこの森を出られるのを心待ちにしておりました

どうか私にお供させてください
この空の下 どこまでもついて参ります
貴方様はここに留まることはできません
私も貴方様無しで ここに留まるつもりはありません」 125

ロビンは微笑んで
少しの間考え込んだ
それからロビンたちは 葉の茂る谷に
三人の亡骸を運んだ

秋の季節が撒き散らした真っ赤な葉は 130

足首の高さまで積もっていた
冬の寝床へ向かう時
秋が最後の一葉まで落としていった

ロビンたちは木の下のかぼみに
三人の亡骸を並べて埋めた
おご
驕りで膨れ上がった大修道院長の腹は
墓に収まりきらなかった

135

ロビン・フッドと森番と
忠実なウィル・スカーレットは
木々の間を抜けて
道なき丘を登っていった

140

ふいにロビンの眼に映ったのは
夕陽に照らされて赤く染まりゆく
懐かしい陽気なロクスリーの町
温かい涙がロビンの頬をつたい落ちた

145

ロビンはその懐かしい町並みと
母の眠る教会墓地の方を見た
憂い顔のウィルがロビンの手に口づけし
そっと顔を背けた

ロビンはウィルの手を掴んで振り向かせ
その肩を軽く叩き
陽気な微笑みを浮かべて こう言った
「さあ 我ら三人 もはや恐れるものは無い」

150

こうして 弦の音に合わせるかのように
三人は軽快に出立した
夜が過ぎ あくる日もずっと
その中心にはいつもロビン・フッド

155

(宮原牧子訳)